

統計編

第1部 最新がん統計

罹患の概要

■最新集計について

集計の期間

罹患年月日が平成19（2007）年1月1日から12月31日の間の1年間。

集計の時期

平成23（2011）年11月15日現在

罹患年月日の決め方

- ① 届出による登録例は初めて当該がんと診断された年月日を罹患年月日とする
- ② 届出がなく、死亡小票の写しによってがん罹患が判明した例は、死亡年月日をもって罹患年月日とする

集計の対象

- ① ICD-O-3分類の性状2（上皮内）、3（悪性、浸潤性）で示される新生物（脳腫瘍は性状にかかわらず集計対象）
- ② DCO例については、①に加えて、ICD-O-3分類の性状1（良性・悪性の別不詳：例 悪性の明示のない〇〇腫瘍）で示される新生物による死亡で、部位が脳、肝、膵、腎、膀胱、肺

精度指標

DCN：25.8%（上皮内がん除く） 24.6%（上皮内がんを含む）

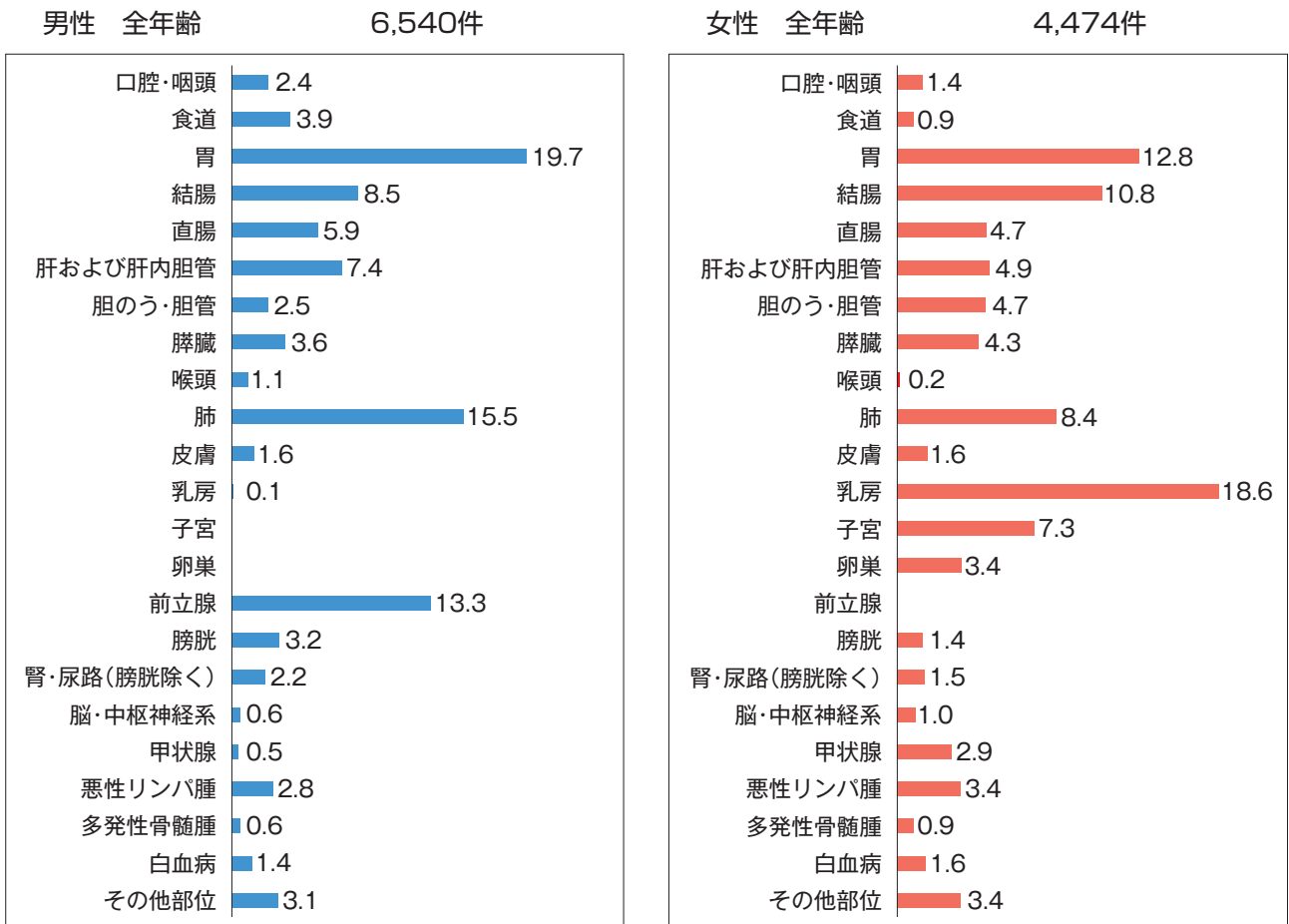
DCO：15.5%（上皮内がん除く） 14.8%（上皮内がんを含む）

I/M：2.08（上皮内がん除く） 2.18（上皮内がんを含む）

■罹患の概要

2007年栃木県において、男性延べ6,540件（上皮内がん除く）6,758件（上皮内がんを含む）、女性延べ4,474件（上皮内がん除く）4,773件（上皮内がんを含む）の、合計延べ11,014件（上皮内がん除く）11,531件（上皮内がんを含む）のがんが、新たに診断された。男性で最も多いがんは胃がんであり、肺、大腸（結腸・直腸）、前立腺、肝と続く。女性で多いがんは乳房、次いで大腸（結腸・直腸）、胃、肺、子宮と続く（図1）。

図1 部位内訳(%)（表1-Aから作成）



年齢別に見たがんの罹患

年齢別にみると、男女ともに、2007年に新たに診断されたがんの65歳以上の割合は男では約7割、女では約6割を占めた。一方、働き盛りの40-64歳の年齢層も全体の約3割を占めている(図2)。

女性の40-64歳のがんが多いのは、この年齢層の乳がんが多いためである。また、女性の15-39歳のがんが男性よりも多いのは、この年齢層の乳がんと子宮がんが多いためである(図3)。

ほとんどの部位のがんは、男性が女性より罹患率が高い。男女とも年齢が高くなるほど罹患しやすく、特に50歳以上になると年齢階級別罹患率が上昇する。一方子宮においては20歳代、乳房においては30歳代から罹患率が上昇する。(図4)

図2 年齢別内訳(%) (表2-Aから作成)

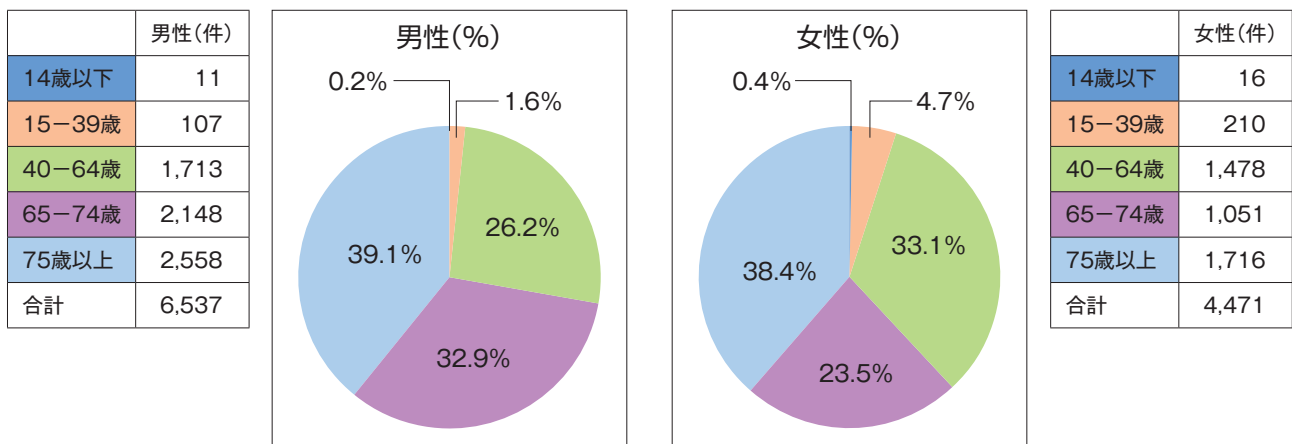
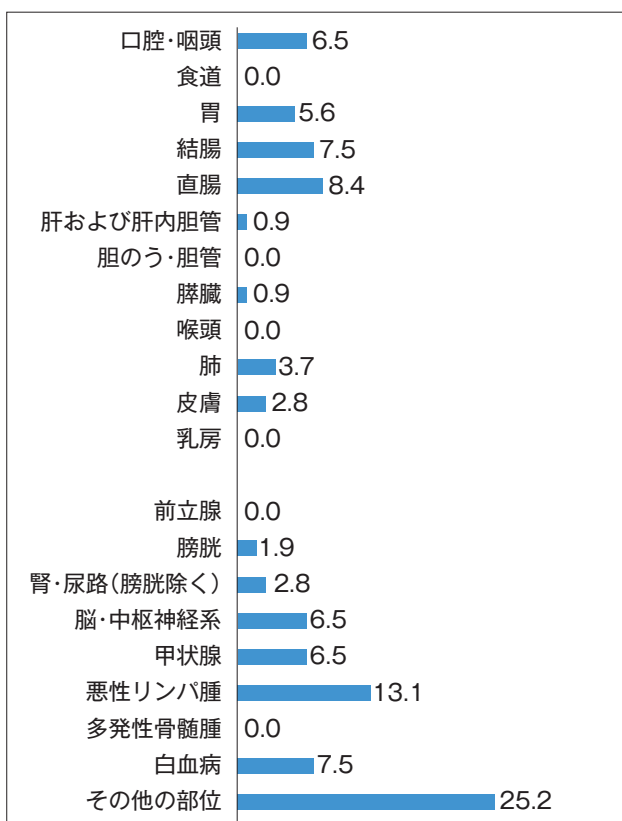
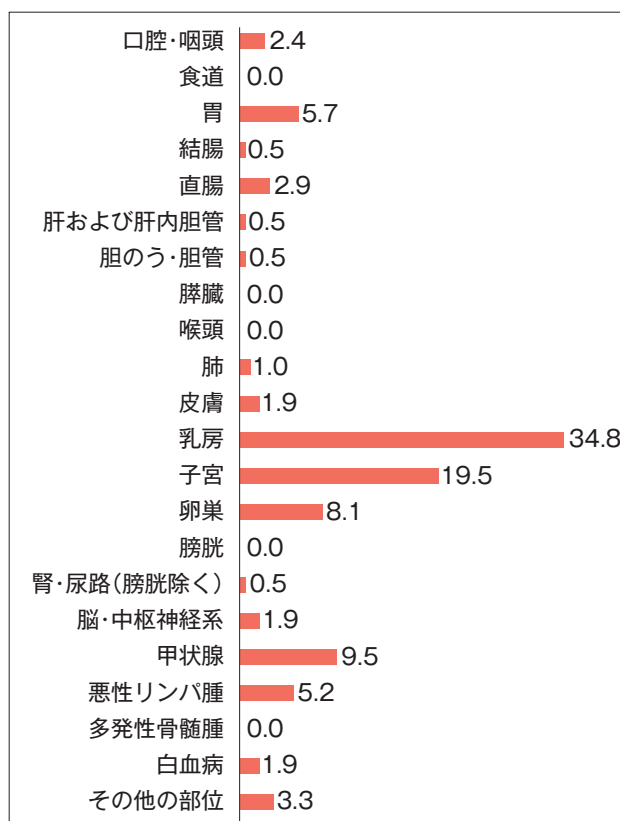


図3 年齢別部位内訳(%) (表2-Aから作成)

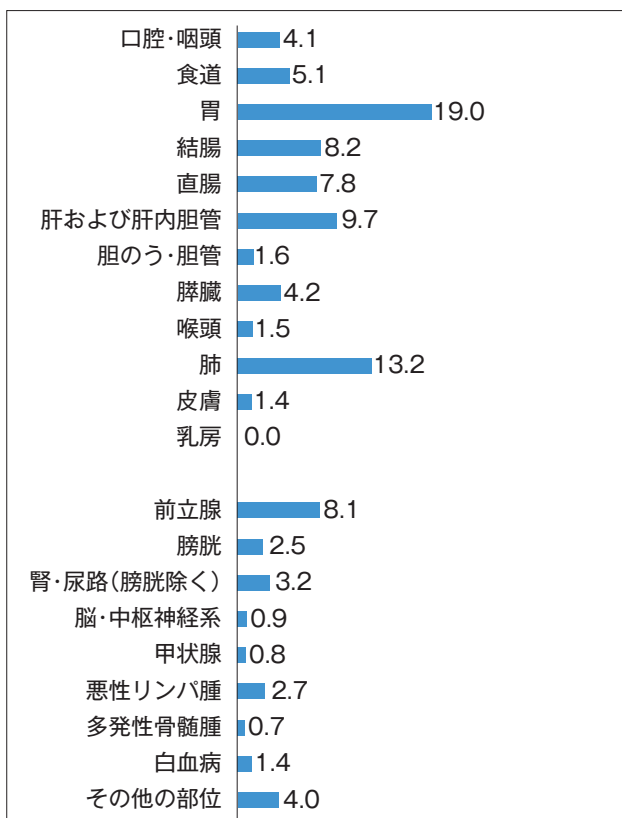
男性 15-39歳(%) 107件



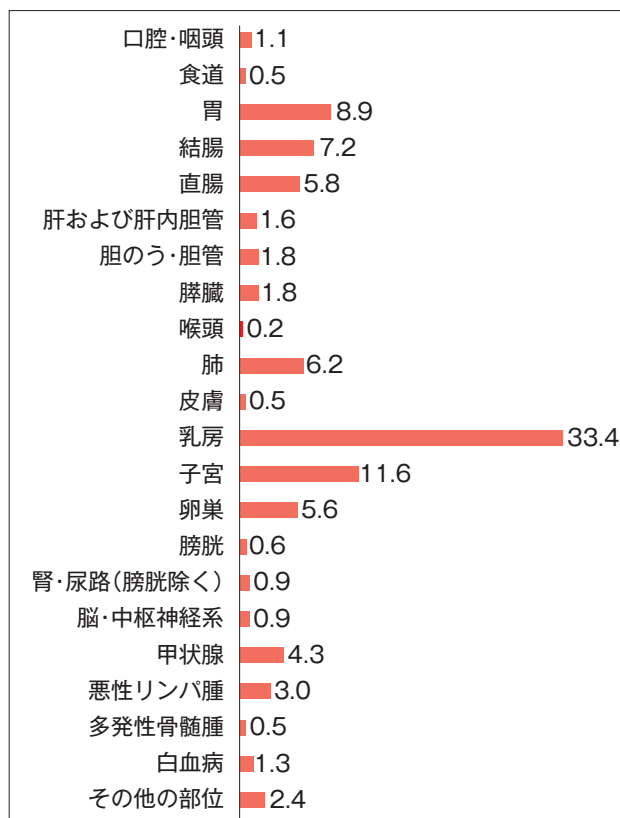
女性 15-39歳(%) 210件



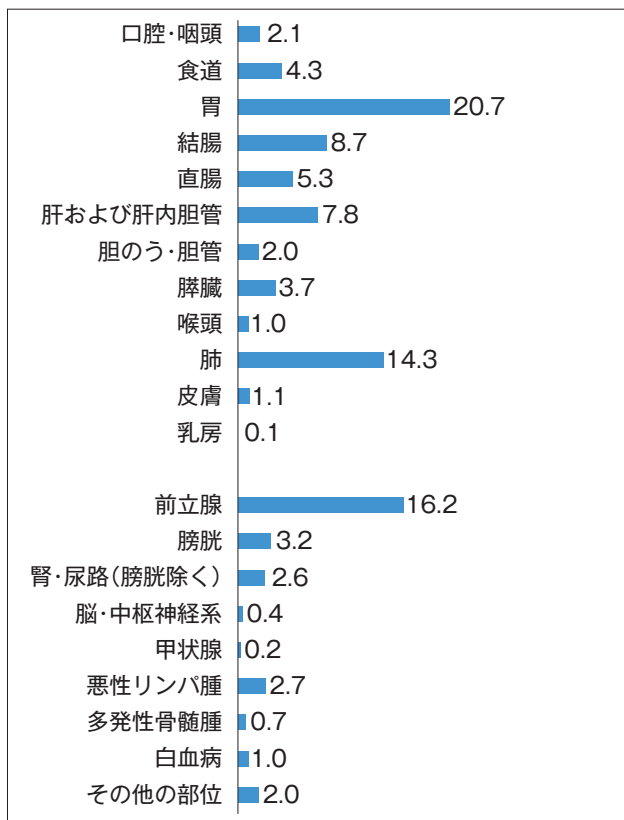
男性 40-64歳(%) 1,713件



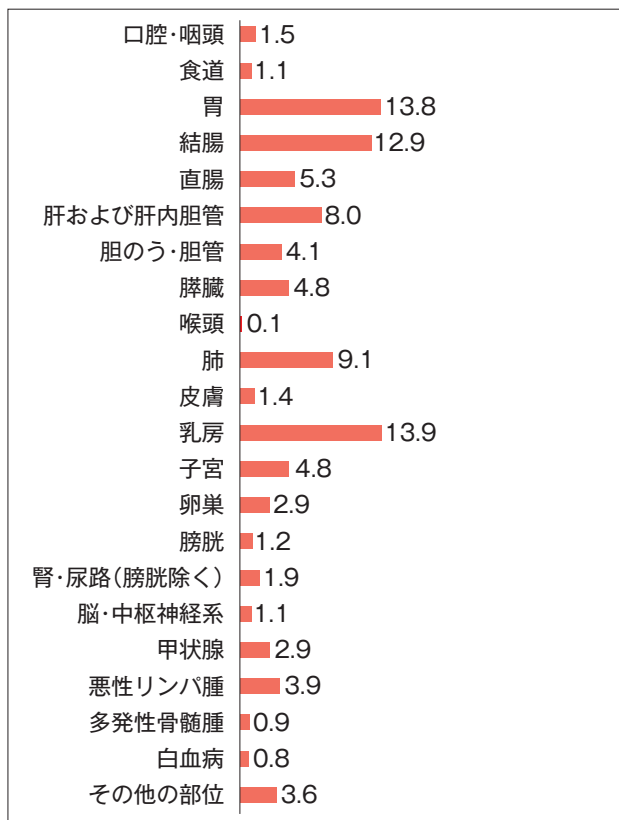
女性 40-64歳(%) 1,478件



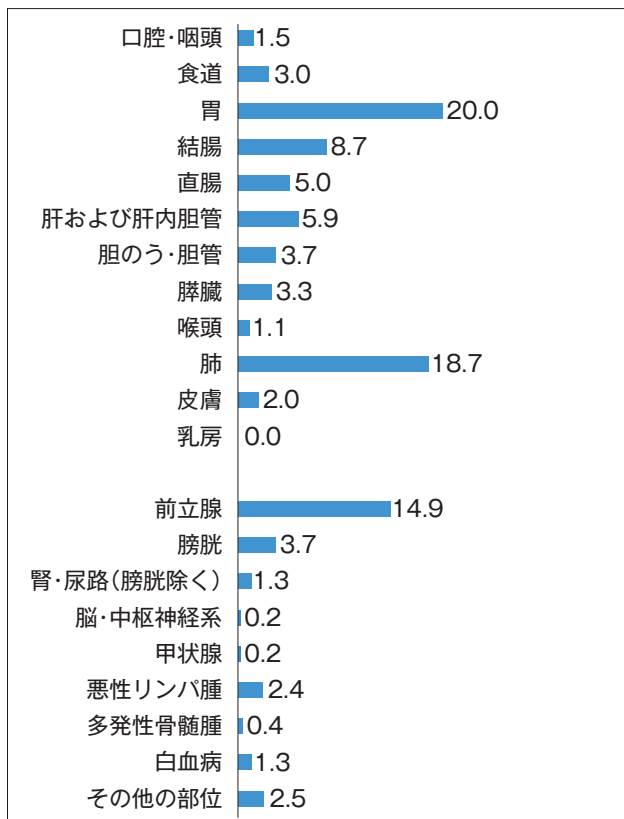
男性 65-74歳(%) 2,148件



女性 65-74歳(%) 1,051件



男性 75+歳(%) 2,558件



女性 75+歳(%) 1,716件

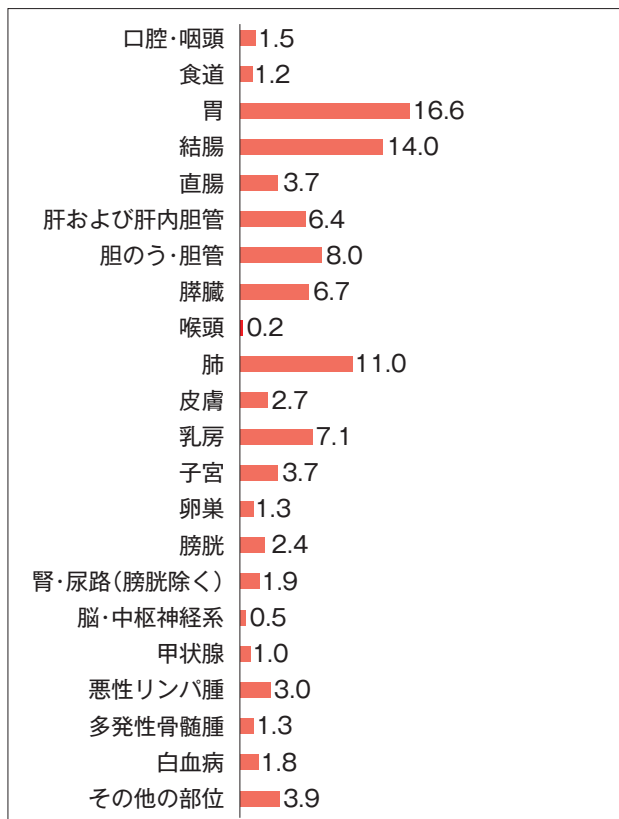
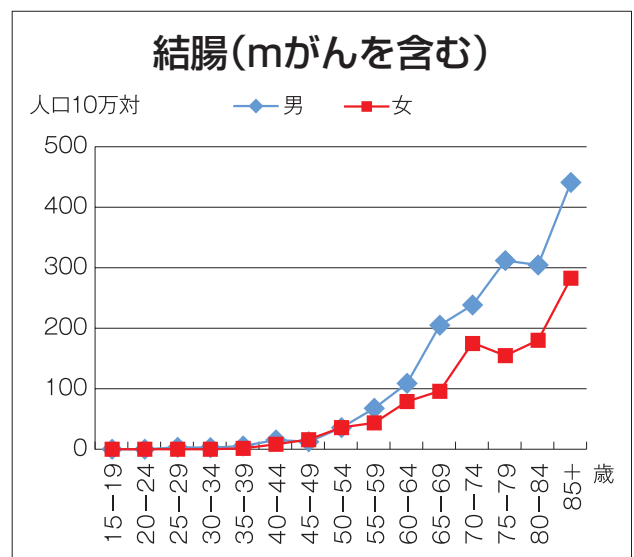
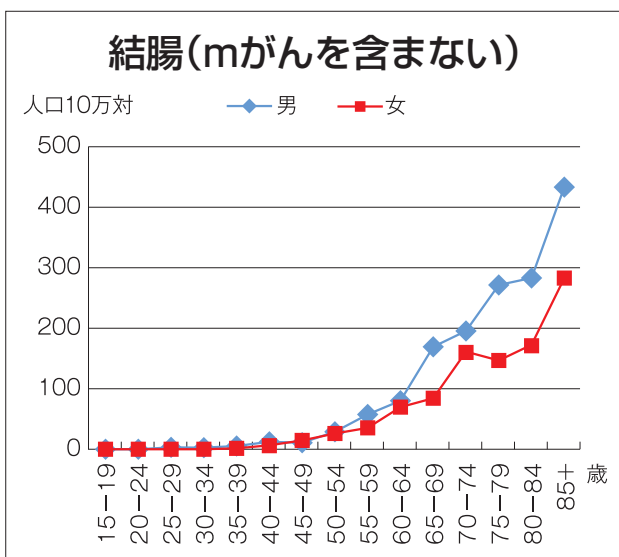
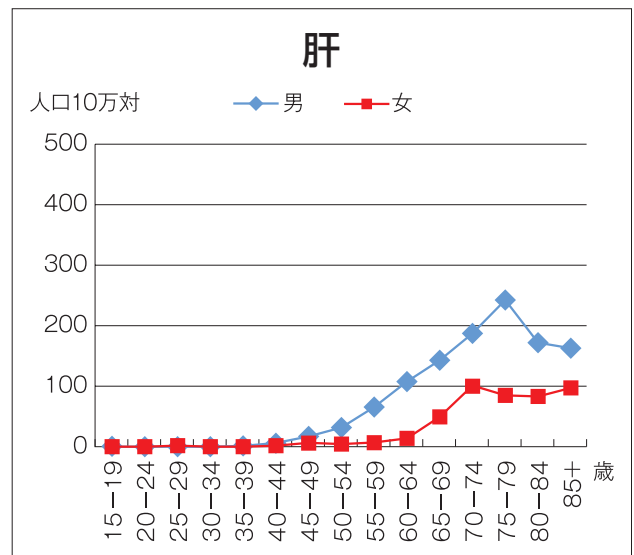
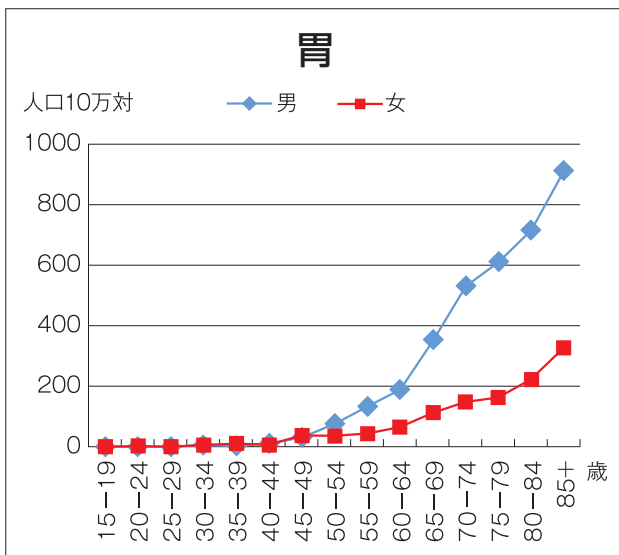
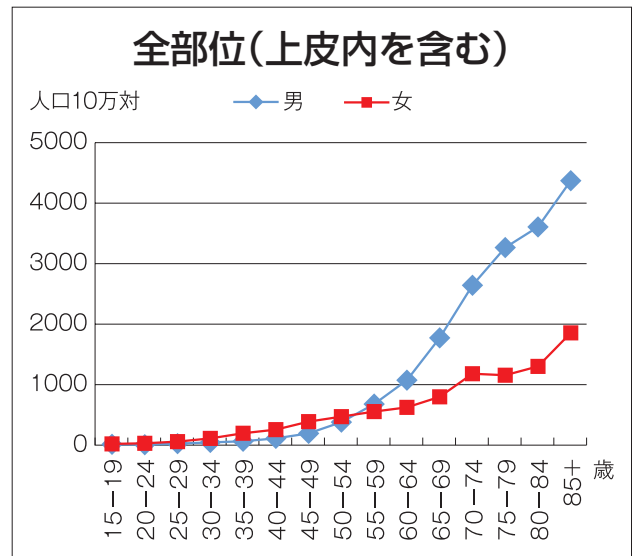
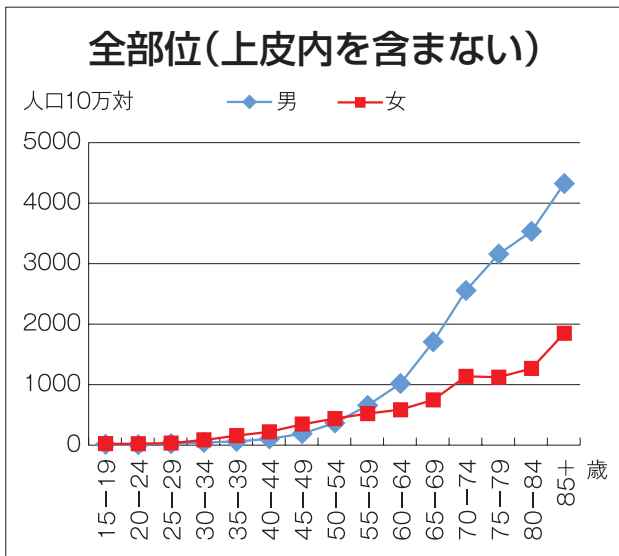
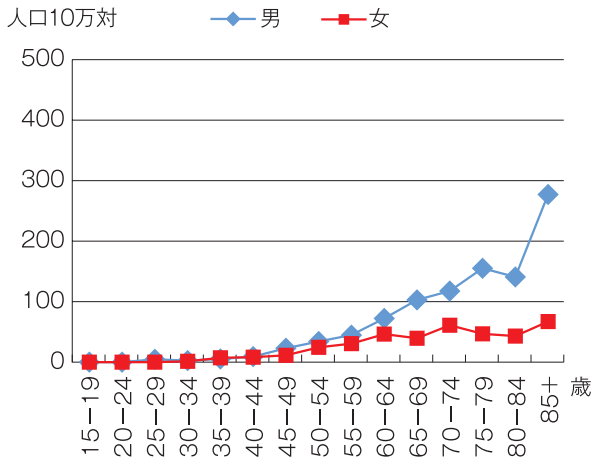


図4 部位別年齢階級別罹患率:人口10万対 (表3-A、Bから作成)

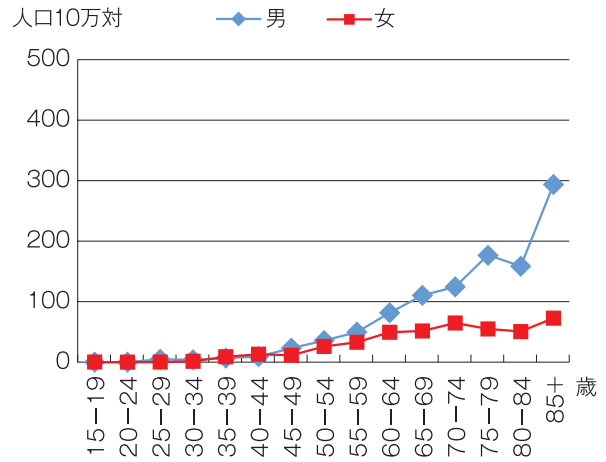


注)mがんについて:我が国の地域がん登録では大腸(結腸および直腸)の粘膜内がん(mがん)は上皮内がんとして扱う

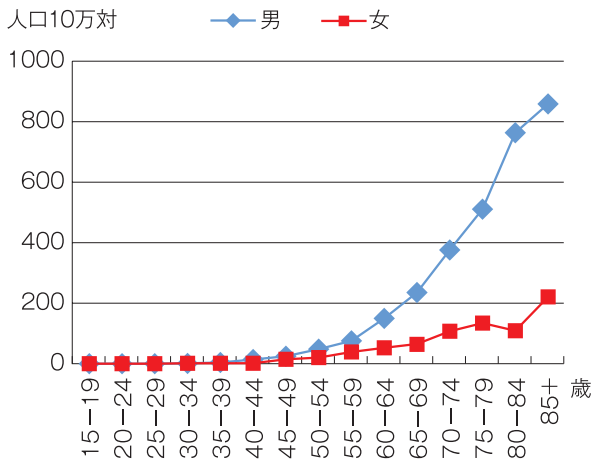
直腸(mがんを含まない)



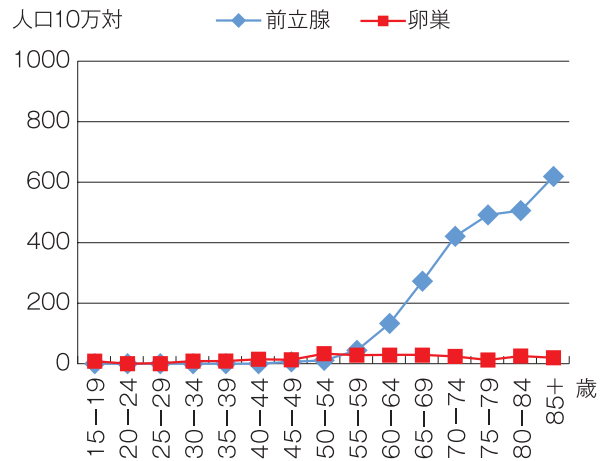
直腸(mがんを含む)



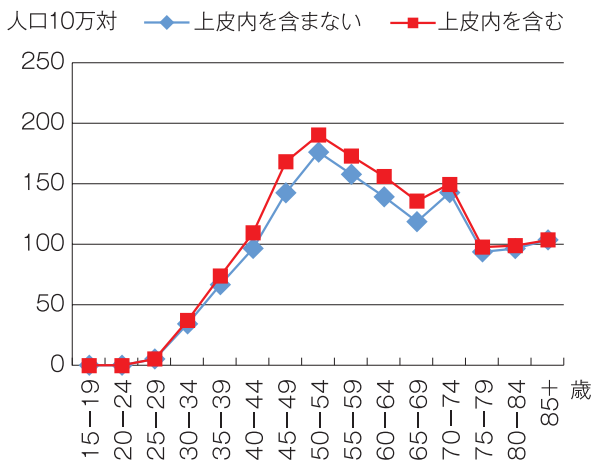
肺



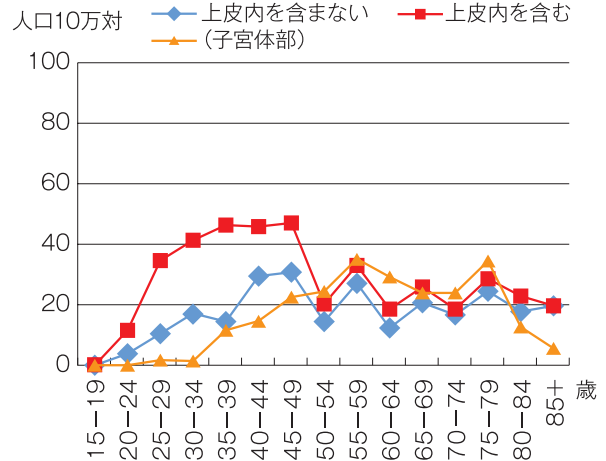
前立腺・卵巣



乳房



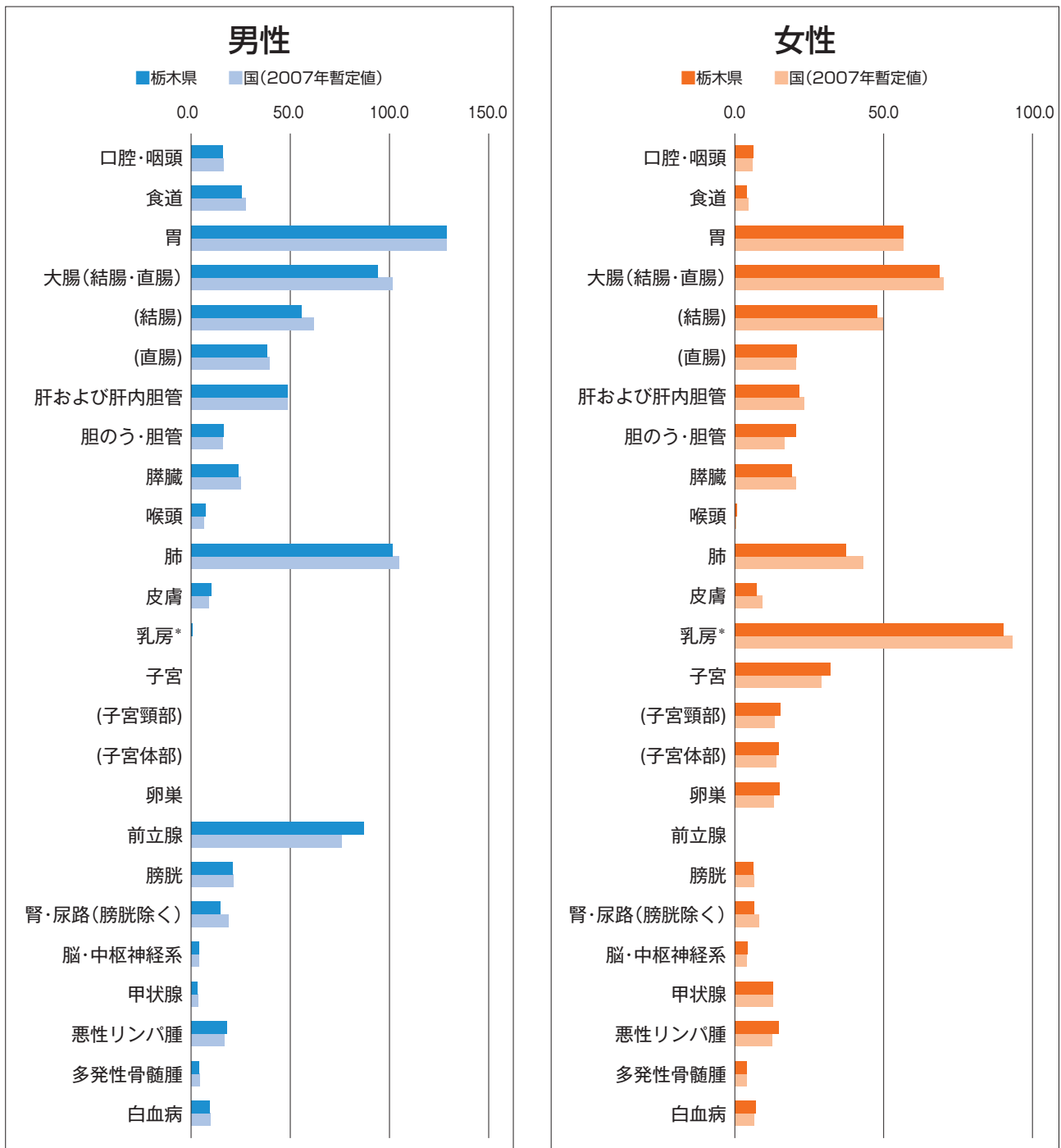
子宮頸部



栃木県のがんの罹患の特徴

日本全体の推計値と比較して罹患率はほぼ同じような傾向があるが、前立腺がんが全国と比較して高かった。2007年症例より届出数が増加し、DCNが低くなり把握もれが減少した。実態に近い罹患率の比較と考えられる。(図5)

図5 部位別がん罹患率:人口10万対 (表1-Aから作成)



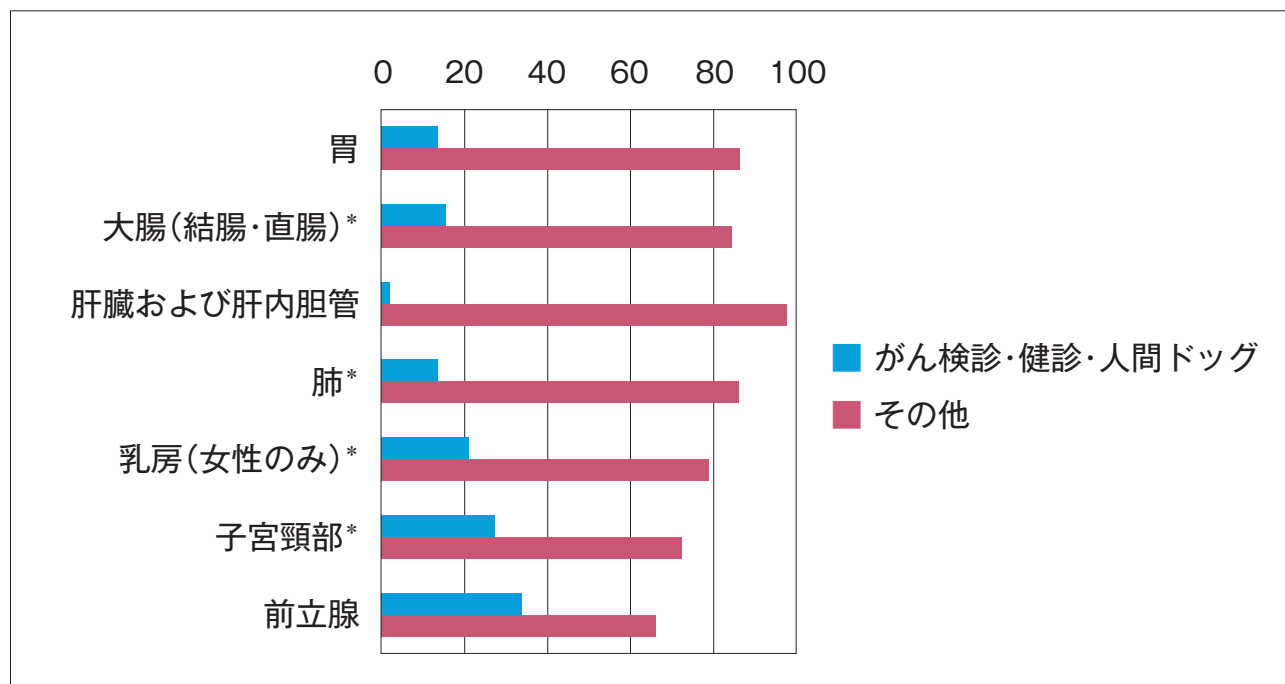
*乳房はどちらも上皮内含む

国の値は全国がん罹患率モニタリング集計 MCIJ暫定値最新年2007より引用。

発見経緯

発見経緯については、旧登録票の選択肢にがん検診と明記されていないことから、2007年症例においては一部健康診断・人間ドックなどに分類された可能性がある。そのため図6はがん検診・健診・人間ドックとその他に大きく分類して示した。(図6)

図6 部位別発見経緯(%):対象はDCOを除く届出患者 (表4-A、Bから作成)



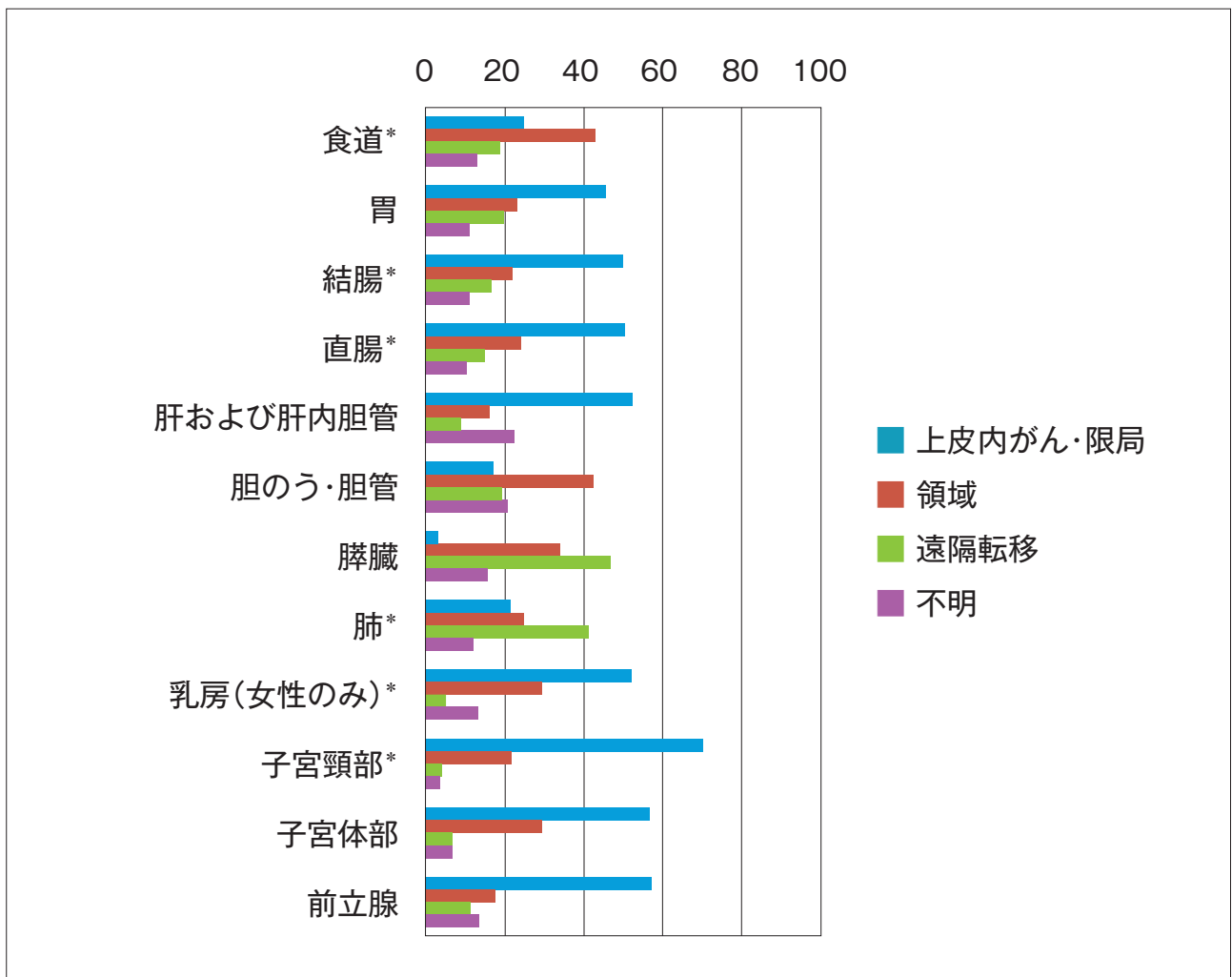
*上皮内がんを含む。

病期

胃、結腸、直腸、肝、乳房、子宮、前立腺などは、発見時の病期が上皮内・限局の割合が高い。肺は、がん検診が実施されている部位ではあるが、発見時に遠隔転移があった割合が高い。膵臓のように腫瘍が比較的大きくなるまで自覚症状の出にくい部位では、発見時に遠隔転移があった割合が高い。

2007年症例の一部は旧届出票で収集され、上皮内がんは登録していたが実際の割合が低く、乳がんや子宮頸がんなどで上皮内がんが少なく見積もられている可能性は否定できない。(図7)

図7 部位別発見時の病期(%):対象はDCOを除く届出患者 (表5-A、Bから作成)

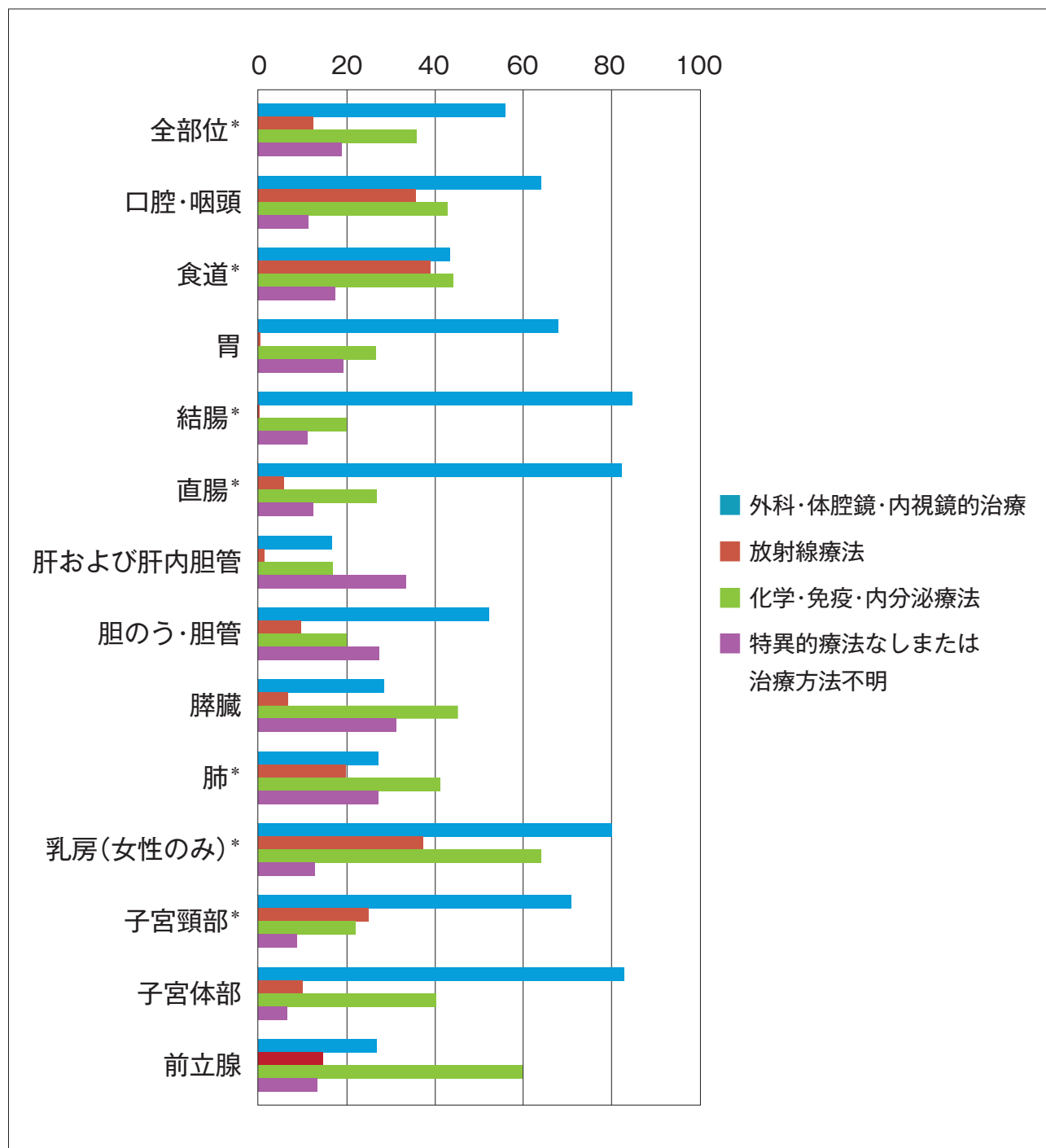


*上皮内がんを含む。胃の限局にはmがんを含む。結腸・直腸の上皮内はmがんまでを指す。
子宮頸部の上皮内はCIN3を含む。
領域は所属リンパ節転移、隣接臓器浸潤を合わせて集計。

初回治療の方法

胃、大腸などの消化管、乳房、子宮では、手術などの外科的治療の割合が高い。初回治療の方法は、複数回答のため外科的治療、放射線療法、化学・免疫・内分泌療法を組み合わせていることが考えられる。届出患者のみの集計のため偏りを否定できないが、初回治療の部位別の傾向が観察される（図8）。

図8 初回治療の方法(%):対象はDCOを除く届出患者（表6-A、Bから作成）



*上皮内がんを含む。